

# 埼玉経済



いむら・たかし 1972年生まれ。  
2001年3月東京大学大学院修了。  
博士(工学)。東京大学大学院助手、  
同講師を経て、11年4月から現職。専  
門は画像処理、ユーザインターフェ  
ースなど。

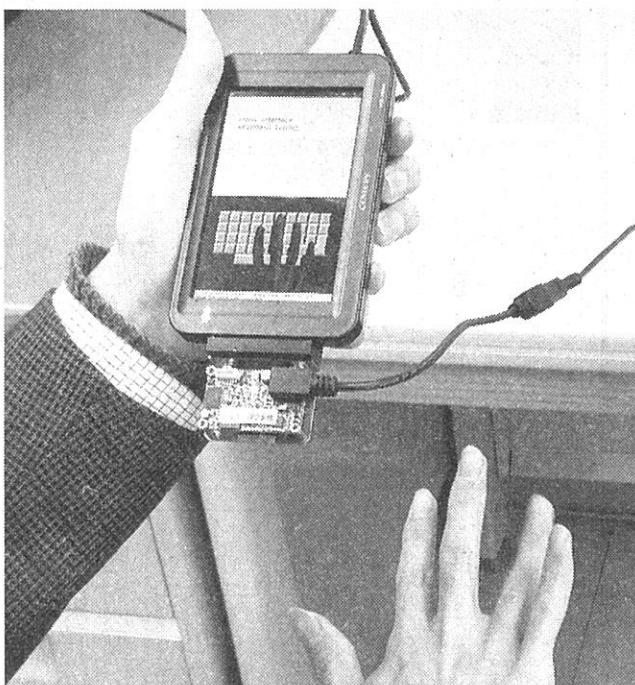
## 埼玉大学・理工学研究の現場

サイ・テク こらむ 知と技の発信

[209]

# 拡張現実が日常を変える

小室 孝 大学院理工学研究科 准教授



空中でキーボードをタピングしている様子

や模様をつけたりするような技術もあります。これはプロジェクトです。その一つが作業支援です。工場内での保守点検作業などにおいて、最近では大きな建造物への映像投影が行われたり、ライブコンサートの演出に使われたりもしています。

■作業支援にも ARは現在、娛樂的な用途が多くを占めています。しかしながら、この技術はより実用的ながら、この技術はより実用的な多くの手順や部品の位置などを案内してくれるようなシステムが開発されています。

■操作性向上に利用 私はこのAR技術をモバイルスマートフォンの画面を通して見るよりも、自分自身の目で仮想空間を見ているという感覚がより強く得られます。

■操作性向上に利用 モバイルスマートフォンの画面は小さいため、文字入力などにおいてタッチパネルの誤操作が頻繁に起こります。

モバイルスマートフォンの画面に制約されず、複数の指を用いたタイピングが可能となります。

■技術普及で変化 このように、ARは我々の生活を便利にしたり、仕事を効率化したりするにも利用できる技術です。

この技術が普及するに伴い、近い将来、我々の日常生活が今とは少しだけ違ったものになるかもしれません。

雑誌やポスターをスマートフォンのカメラを通してみると、CG(コンピュータグラフィックス)で描かれたキャラクターが重なって表示されるアプリケーションをじる存じでしょうか。このような技術を拡張現実またはオーグメンテッドリアリティ(AR)といいます。

人々は人間がCGで作られた仮想世界に入り込めることができるようにするバーチャルリアリティ(VR)という技術があり、物体の表面に映像を投影し、色

想世界を融合させるようにしたのがARです。

### ■ライブ演出にも利用

ARはスマートフォンを用いたものだけに限りません。たとえば、眼鏡型のディスプレイを用いたARもあります。これはスマートフォンの画面を通して見るよりも、自分自身の目で仮想空間を見ているという感覚がより強く得られます。

また、プロジェクタを用いて

企業、団体、商店街などの話題や情報を寄せください  
TEL 048-795-9161 FAX 048-653-9040  
keizai@saitama-np.co.jp